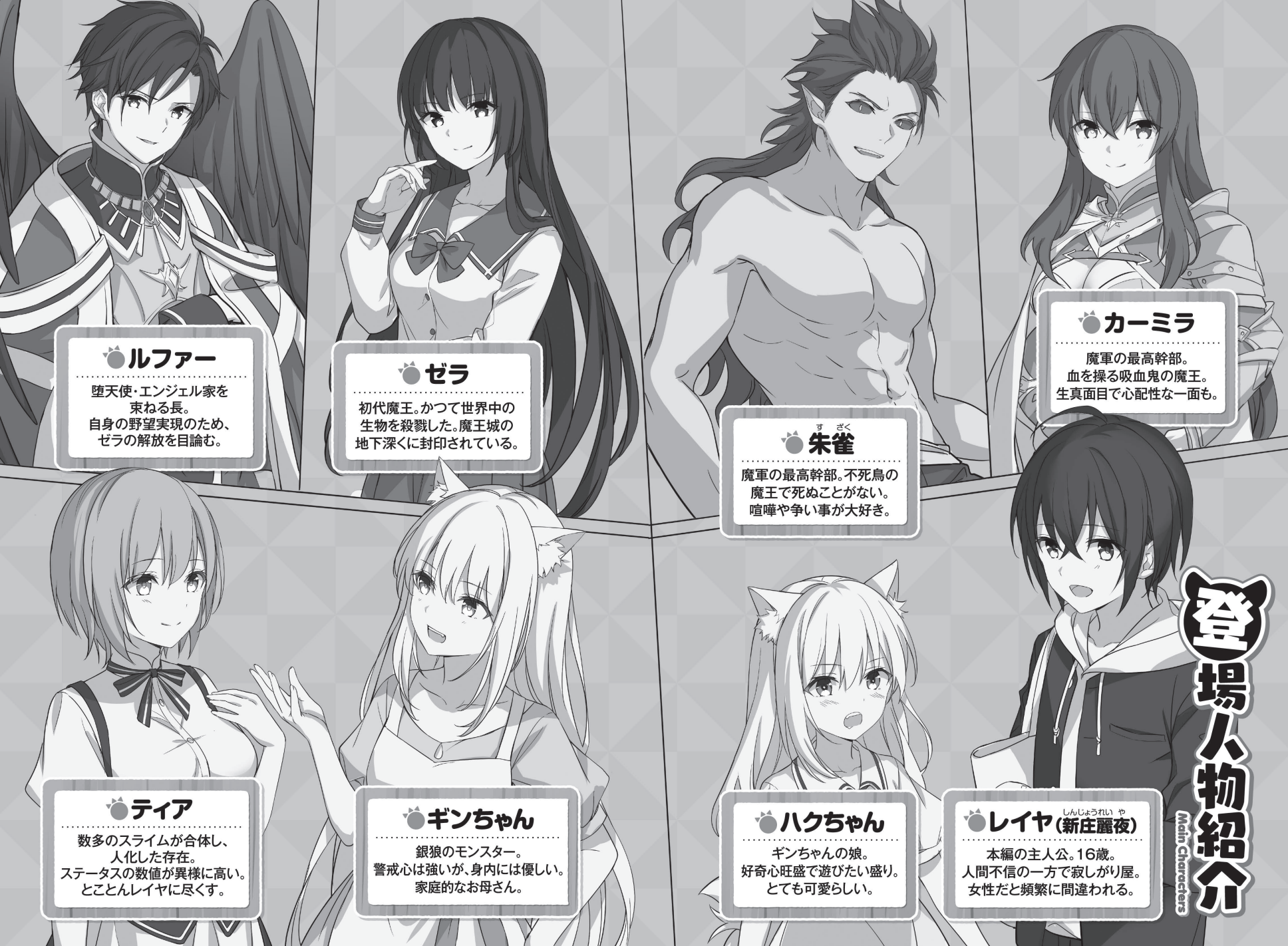
異世界に転移したからモンスターと気ままに暮らします

Isekai ni tenni shitakara monster to kimama ni kurashimasu

NEKO NEKO DAISUKI
ねこねこ大好き

Illustration
ひげ猫


登場人物紹介
Main Characters
ルファー
堕天使・エンジェル家を束ねる長。自身の野望実現のため、ゼラの解放を目論む。
ゼラ
初代魔王。かつて世界中の生物を殺戮した。魔王城の地下深くに封印されている。
朱雀（すざく）
魔軍の最高幹部。不死鳥の魔王で死ぬことがない。喧嘩や争い事が大好き。
カーミラ
魔軍の最高幹部。血を操る吸血鬼の魔王。生真面目で心配性な一面も。
ティア
数多のスライムが合体し、人化した存在。ステータスの数値が異様に高い。とことんレイヤに尽くす。
ギンちゃん
銀狼のモンスター。警戒心は強いが、身内には優しい。家庭的なお母さん。
ハクちゃん
ギンちゃんの娘。好奇心旺盛で遊びたい盛り。とても可愛らしい。
レイヤ（新庄麗夜（しんじょうれいや））
本編の主人公。16歳。人間不信の一方で寂しがり屋。女性だと頻繁に間違われる。

第一章　平和で最強な魔界

俺――新庄麗夜が魔界に来てから一月が経った。

今日も魔王城の大食堂で、スライムの少女ティアを含め、約六百人の魔王とその部下五千人と一緒に、朝ごはんを食べる。

「いただきます」

東京ドーム五個分の広さを持つ大食堂も、皆が口をそろえて手を合わせれば揺れ動く。

凄まじいスケールだ。圧倒的としか言えない。

背もたれがある質素な椅子の上で、愛しいティアが作ってくれた朝ごはんの香りを嗅ぐ。

白いごはん、カボチャの煮つけ、川魚の塩焼き、納豆、豆腐の味噌汁、なすと白菜の漬物が並んでいる。

手始めに、味噌汁のお椀を持つ。亜人の国から輸入した、木彫りに漆を塗った代物で、実に日本的だ。

箸も木彫りでおそろいだ。亜人の国の、エルフ王家の紋章である、麦の模様が刻まれている。

「良いね」
手に馴染む。これを作った職人は手先が器用だ。
「嬉しそうだね」
左隣に居るティアが箸を止めた。ティアの食器も俺とおそろいだ。
「生成チートで作った食器よりもずっと良い」
軽くて持ちやすいし、滑らない。実用性も十分だ。
「亜人の国からプレゼントしてもらって、良かったね」
「実に良いものだ。ラルク王子は俺のことを分かってる」
あまりにも綺麗だから、三日間、使うべきか飾っておくべきか迷ったけど、使って正解だった。
「麗夜が食器に夢中なんて珍しいね」
ティアはもぐもぐと咀嚼しながら言う。
「これを見ると目が休まるからな。ラルク王子、ありがとう」
魔王城の壁、床、天井は、臓物をぶちまけたかのように赤黒く光っていて、正直目が痛い。
初代魔王ゼラの趣味らしいが、悪趣味としか言えなかった。
一月も居たらさすがに慣れてきたけど、それでも禍々しいことに変わりない。
それを愚痴ったら、すぐに家具や食器をプレゼントしてくれた。
「確かに優しい感じがするね」

ティアは木造りのテーブル、椅子、羊の毛で作った絨毯に目を移す。
「今まで生成チートで作ったパイプ椅子とか使ってたけど、あれより全然いいな」
「ご機嫌だね」
クスクスとティアが微笑むので、俺は少し恥ずかしくなった。
「食器も良いけど、ごはん冷めちゃうよ」
「分かってるさ」
食器の批評は終わり。味噌汁をすする。
「うまい」
出汁と味噌のほどよい塩辛さ。ごはんによく合う。漬物の漬かり具合も良し。
カボチャの煮つけは甘くて美味しい。川魚は身が締まっていて、納豆はしっかりねばねばしてる。
理想の朝ごはんだ。
「ただでさえ美味しいのに、さらに美味しくなった」
「えへへへ」
ティアははにかみながら、改めてお椀の模様を見た。
「うん！　ティアもこれ好きになった」
そしてさっきの一口よりも、多めにごはんを口に入れる。
「とっても美味しい」

ティアは自分で作った朝ごはんに満足げに頷いた。
「また腕を上げたな」
「にへへ。食器のせいかな？」
「食器はおまけ。確実に腕が上がってる」
「うへへ！　やった」
ティアはテレテレと頬を赤くして、カボチャの煮つけを箸でつまむ。
「麗夜、あーん」
そして、ニコニコとそれを差し出してきた。
「あーん」
気恥ずかしいけど、断ると悪いので食べる。
口の中で、カボチャがホロホロと崩れた。自分で食べるより、美味しく感じるから不思議だ。
「お返し」
俺もカボチャの煮つけを箸でつまんで、ティアに差し出す。
「ありがと」
ティアがぱくりと食べて、ハムハムと口を動かした。
「へへへ。美味しい」
そして、お返しにと、今度は川魚の塩焼きの身を解す。

「あーん」
食べさせっこの始まり。一度始めたら、食べ終わるまで止まらない。
行儀が悪いけど、楽しいからやめられない。
「うまうま」
俺とティアが食べさせっこしている間に、右隣に座る銀狼の少女ハクちゃんは、元気にオムライスとハンバーグのお子様ランチを食べていた。
このお子様ランチは、ハクちゃん専用の特別製だ。お母さんのギンちゃんが、わざわざハクちゃんのために作ったのだ。
「あぐあぐ」
オムライスとハンバーグを口いっぱいに頬張る。口元がケチャップやソースで汚れてもお構いなしだ。
夢中で食べるので、ガチャガチャと銀のスプーンと陶器の皿がぶつかり合う。
「美味しい？」
幸せそうな笑顔に、俺は微笑みかける。
「うん！」
桃のシャーベットをリンゴジュースで流し込みながら、ハクちゃんが慌ただしく頷いた。
ラルク王子がくれた、ハクちゃん用の綺麗な刺繍入りの前掛けが、ジュースとソースでベタベタ

になっている。
「ふふふ」
ティアが、そんなハクちゃんを見て笑った。
「ハク、もうちょっと行儀よく食べろ」
お母さんのギンちゃんは、ちょっと離れたティアの隣から、ため息交じりに注意する。
「分かってる分かってる」
ハクちゃんは生返事だ。そして、ごはん粒を頬っぺたにくっつけたまま言う。
「おかわり！」
ギンちゃんはそれを聞くと、ホカホカの鶏肉ゴロゴロシチューを掬う手を止めた。
「全く、仕方のない娘じゃ」
ギンちゃんは元気いっぱいな娘の躾に悩みながら、大食堂の奥にある厨房へ向かった。
「麗夜、あーん」
「あーん」
マイペースにティアと食べさせっこをしながら、一緒に食べる魔王たちを見渡す俺。
不死鳥の魔王朱雀、リスの魔王ケイブル、吸血鬼の魔王カーミラ、バジリスクの魔王メデューサ、ゾンビの魔王マリアちゃん、オークの魔王ガイなど、魔軍所属の魔王がズラリと座っている。
彼らは魔軍の最高司令官や最高幹部だ。

魔軍を動かすには、彼らとのコミュニケーションが必須なので、仲良くなるため近くに座るようお願いしている。
狙いは成功、みんな最初は緊張していたが、今ではリラックスして、美味しそうに食事をしてくれる。
「ガハハハ！」
魔軍の切り込み隊長であるガイが楽しそうに、小樽のような鉄製の大ジョッキを掲げ、五度目の乾杯をした。
魔王の中でも巨漢のガイは、ウィスキー並みに度数の高い酒をガブガブ飲みながら、皿いっぱいの骨付き肉を、生で骨ごと食べている。
この酒も、亜人の国から輸入したものだ。
度数が高すぎて、俺もティアもギンちゃんも飲めなかった。
ガイが興味津々だったため試しにあげてみたら、とても気に入ってくれたのだ。
「ガハハハ」
ガイは笑い上戸なのか、笑いながらジョッキで酒を一気飲みする。
鎧ネズミの胸当てにボロボロのズボン、背中に大斧を背負っているから山賊みたいだ。
もうちょっとちゃんとした服を着て欲しいけど、戦いが本能の彼にとって、小綺麗な服装は動きづらいらしい。

ある意味、あの荒々しい姿こそ彼の正装だ。
「ガハハハ！」
ガイの笑い声は大食堂に良く響く。うるさいが、皆を笑顔にする力があるので注意はしない。
ハクちゃんがガイを真似して、ジュースを一気飲みした。
「ふむ。良い」
魔軍副司令官のカーミラが静かに微笑む。
彼女は黒くて軽い、血を魔力でこねた鎧をまとっている。赤い髪がサラサラと輝き、見た目通り礼儀正しく、物静かな女騎士。
魔王の中でも美人なカーミラは、トマトと酒を混ぜたカクテルにご満悦。カクテルグラスも似合っていて、実に絵になる。おつまみは鳥や豚の血で作ったゼリーだ。
丁寧にスプーンで掬い、小さく口を開けて食べる。そしてスッと喉にカクテルを通していた。
本当に上品だ。
「ああ……こんなに美味しい果物を、好きなだけ食べられるなんて」
魔軍最高司令官のケイブルは、たくさんの果物に感激していた。
彼はトナカイのような角を持ち、腕や脚には、茶色のふさふさした毛が生えている。
顔はリスをいかつくした感じで、ドラゴンにちょっと似ている。
上半身に分厚い鉄鎧をつけていて下半身は裸。まるでゴリラとドラゴンのキメラのようだ。

以前、俺は魔王たちに、人と同じ姿になるようにお願いした。
魔王たちは了承し、人型となった。
ある者の肌は蛇のような鱗、ある者の肌はゾンビのように血色が悪い。変身しても種族の特徴が残るためだ。
しかしケイブルは変身するのが苦手だった。だから彼は現在、魔王の中で唯一、人とはかけ離れた姿をしている。
「美味しい」
そんな恐ろしい姿をした魔王が、桃やクルミ、リンゴに感動しているのだから微笑ましかった。
ひまわりやリンゴなどの種を、一粒ずつ爪先でつまんで食べているから、リスのように可愛らしくて仕方ない。
おまけに笑うと目元が優しくなる。そう、性格は穏やかで優しいのだ。
「うふふふ」
メデューサは生肉の塊を丸呑みしながら、日本酒を楽しんでいる。チロチロと蛇の舌が踊るように赤い唇からはみ出した。
蛇だけに蟒蛇なのか、まだ朝なのに三樽も飲んでいる。
そして、彼女はなぜ下着もつけずに、ローブを羽織っただけの姿で動き回るのだろう。チラチラと太ももや胸元が見えるから、こっちが恥ずかしくなる。

魔王には羞恥心が無いので、仕方ないのかもしれない。
「甘い」
マリアちゃんは、ケーキをバクバク食べていた。これ、なんと彼女の手作りなのだ。
亜人の国からもらったお菓子が美味しかったようで、自分で作ってみたいと言い出した。
初めは不味かったがすぐに上達、今では俺やティアよりもお菓子作りが上手い。
元人間だからか、マリアちゃんは手先が器用だ。よくハクちゃんに、手作りのお菓子を作ってあげている。
レパートリーは広く、ケーキ、パイ、シュークリーム、饅頭など色々作れる。味も、チーズ味だったりチョコ味だったりバナナ味だったり。
そんな彼女はハクちゃんとおそろいの子供用ドレスを着ていた。
「マリアちゃん、私にも頂戴」
おかわりが来るまで退屈だったらしい。ハクちゃんがトトトッと、マリアちゃんの元まで走る。
「良いよ。その代わりなんか頂戴」
マリアちゃんは苺のショートケーキを差し出して笑った。
「何が欲しいの？」
ハクちゃんは内容を聞く前に、ケーキに口を付ける。なんというか子供らしい。
「じゃあ遊んで！」

「うん、じゃあ駆けっこしよ！」
そうしてマリアちゃんとハクちゃんは、唐突に大食堂を飛び出していった。
「ご馳走様くらい言って欲しかったな」
「二人とも、後でギンちゃんに怒られるね」
ティアと二人で、叱られるハクちゃんたちを想像して笑った。
ふと、左手の長テーブルにいる、ドラゴン騎士団とワイバーン騎士団が目に入った。
「うん、うまい」
ドラゴン騎士団隊長のダイ君は、ワイバーン騎士団隊長のキイちゃんが作ったクリームシチューを、白いパンに絡めて食べていた。
こちらまで良い香りが漂ってくる。本当に美味しそうだ。
「ティア様に教えていただいたから、当然よ」
キイちゃんは穏やかに口元を緩ませた。
最近は魔軍にかかりっきりだけど、あの様子だと、楽しくやっているようで安心した。
「平和だな」
朱雀が俺を見て微笑む。
「良いことだ」
このまままったり暮らしたい。

「ハクの奴、どこに行った……？」
おかわりを持ってきたギンちゃんが低い声で唸った。
ハクちゃん親子は平和じゃなさそうだ。

「ご馳走様でした」
朝ごはんをゆっくり楽しく食べて、二時間後、俺たちは手を合わせた。
「皆、食器はちゃんと厨房に持って行ってね」
ティアが言うと、魔王たちは慌てず騒がず、食器を落とさないよう両手で持って、厨房まで行列を作る。
一月前は慣れなかったためか、行列の周りで右往左往したり、早く進めと声を荒らげたり、食器を落としたりと大変だった。今は苦も無く片付けができている。
それに以前は、食べ終わっても口や手を拭かなかったため、肉汁や血、果物の果汁などで口や手がベタベタだった。
おかげで食器はもちろん、服やテーブルも汚れた。
それが今では、しっかりとナプキンで拭いている。
少しずつマナーが身につき、協調性や秩序、ルールを守る習慣も芽生えていた。
「良くなってきたね」

ぼそぼそっとティアが耳元で言い、微笑んだ。
「おかげで、皆も仲良くなってる気がするよ」
意識改革が上手くいっているのだろう。
魔軍は好戦的な魔王の集まりで、非常に我が強い。だから協調性が無かった。それが少しずつ改善されていると感じる。
そんなことを思っていると、食器を戻し終わったガイが、ゴキゴキと首を鳴らしながらやって来た。
「終わった終わった！」
乱暴に座ると丸椅子がギシギシ軋む。そして退屈だと言うように、大あくびをかました。
マナーが悪い。椅子に座る時はそっと。巨体なんだから丁寧に扱わないと壊れてしまう。
それに、堂々と大あくびするのもいただけない。
「まだまだ時間かかるね」
隣でティアが呆れた声を出した。
「全くだ」
俺は作り笑いで返すしかなかった。しかし、ここでがみがみ叱るのはダメだ。
彼らは食事のマナーを習っているが、日常生活においてのマナーはまだ知らない。
それなのに怒れば、彼らは何がなんだか分からず怖がってしまう。

俺は恐怖で支配したいんじゃない。あくまでも仲良くしたいだけだ。
今回は見なかったことにしよう。注意するのは、日常生活のマナーを教えてからでいい。
焦る必要はない。少しずつ、一歩ずつ歩み寄る。
それが俺流の接し方だ。
「窮屈だった？」
俺は笑顔でガイに話しかける。
「いやはや、椅子に座って服を汚さずに食うってのは、やっぱり慣れねえですね」
ガイはやはり疲れたように、頬杖をついて足を組んだ。
「ババッて口に放り込みたいんだけどね。まどろっこしくてイライラしちゃうわ」
メデューサもガイの隣に来て、テーブルの上に座った。
さすがにテーブルの上に座るのは、はしたない。叱るべきか？
「ふむ。難しい」
ティアも俺と同じことを思ったのか、テーブルに両肘をついて、頬杖をつく。
「俺たちもマナー悪いな」
「およ？」
ティアは頬っぺたから手を離して、自分の体勢を確認した。
「マナーは難しい」

ティアの仰々しい顔が面白かった。
まぁ、今はメデューサとガイには何も言わないでおこう。
皆の様子を見る。
他の魔王たちも食器を戻し終わると、ガイと同じように安堵した顔をしていた。
ガイと同じ考えの者が多いようだ。
意識改革とは、今までの習慣を矯正するということだ。想像以上のストレスだろう。
ガイとメデューサの態度はそれが露わになっただけ。
「無理させてごめんよ」
この矯正は、強制に近い。そう思うと心苦しい。
何せ俺自身、強制されるのが大っ嫌いだから！　誰が言うことなんて聞くか、と思ってしまう。
「そんな！　麗夜様が謝るなんて！」
ガイが血相変えて、あたふたし始めた。メデューサもオロオロする。
「そうそう！　麗夜ちゃんには麗夜ちゃんの考えがあるんでしょ！　気にしないで」
「俺たちはバカばっかりですから！　無理した方が頭が良くなるってもんで！」
他の魔王も大混乱になってしまった。
「お前たち！　麗夜様に口答えするとは何事だ！」
騒ぎを聞きつけてやって来たカーミラは、顔を真っ赤にしてカンカンだ。

「麗夜様！　怒らないでください！　泣かないでください！　麗夜様は一ミリも悪くないんですから！」
気の小さいケイブルなんて、全く悪くないのに土下座していた。
皆の困惑する姿に、俺の方が困惑してしまう。
「落ち着いて。俺は怒ってない。むしろ皆に感謝してるくらいだ」
世間話くらいの気持ちで謝ったのに、こんなに大騒ぎになるなんて思わなかった。
「感謝されたわ！」
「俺たち凄いな」
「むしろ麗夜様が凄い」
良く分からない感動が広がっていく。
「麗夜様……なんとお優しい」
カーミラは涙を流していた。初対面では冷たい印象だったけど、実のところとても感情が豊かだ。
「ありがとうございます！」
ケイブルはペコペコお辞儀している。
君って本当に、お辞儀と土下座が好きだね。魔王の中で一番忙しいんじゃないか？
「はは……まぁ、良いか」
思わず、俺の口から苦笑が漏れた。

この騒がしさは楽しい。魔王は個性的で我が強い。直情的で短絡的だ。
でも、だからこそ、子供のように素直だ。
それがなんだか嬉しい。
「上手い具合にまとまってきたな」
煙の雲の上でごろ寝していた朱雀が、キセルを吸いながら言った。
「まとまってる？」
ガイとメデューサが反応した。
「昔はこうやって顔合わせると、言い争いか殴り合いか殺し合いだっただろ」
笑いながらの朱雀の言葉に、ガイが腕組みする。
「確かに、こんな風に皆と話したことはねえな」
メデューサも腕組みして唸る。
「大声出さないのも初めてかも」
二人が神妙な顔をすると、近くで話を聞いていた魔王たちも同様の表情を浮かべた。
「俺たちは基本的に、好き勝手やってたからな」
そう言って、魔王たちが顔を見合わせて頷き合う。
思い出したように、メデューサがガイに話しかけた。
「ごはんの取り合いで、殺し合いになった時もあったわね」

「そう言えば、お前が産んだ卵をつまみ食いして喧嘩になったな」
「あの時は二日くらい殺し合ったわね。カーミラちゃんが止めたからやめたけど」
「そしたら次の日、俺の部下がお前に食われた」
「こっちもつまみ食いしなくちゃ」
「それでまた喧嘩になったな！」
「一週間くらい戦ったわね！」
ガイとメデューサは、笑顔で物騒な昔話をしている。
俺が来る前まで、魔界は雑草も生えない地獄だった。
だから、仲間割れも共食いも日常茶飯事だった。でも今は違う。争う必要はない。
「皆にはもっと仲良くして欲しいんだ」
説明しなくても受け入れてくれるだろうけど、事情くらい話しておかないと気持ちが悪いし、理由を知れば不満を抱かずに済むと思う。
仲良く楽しく。それを心掛けたい。
「昔はごはんが無くて争うこともあったけど、今は違う。だから仲良くして欲しい」
「別に俺たちは、喧嘩するつもりはありませんぜ」
ガイはガハハと、粗野に笑う。
「喧嘩しないのは当然だ。皆には、相手を気遣う心を持って欲しい」

「気遣う？」
魔王たちが首をひねる。
「相手の気持ちを考える。例えば困っている相手を助けるとか」
「助ける……」
魔王たちは難問に出会ったかのように、難しい顔になる。
そこまで考え込む必要はないんだけど……。
皆にとっては考え込まないと理解できないくらい、馴染みのない言葉のようだ。
「相手が何か困ってたら、ちょっと手を貸すだけでもいい」
「でも私たちってバカだから、何に困ってるかなんて分からないわ」
メデューサが呟くと、皆が一斉に頷いた。
「だからこそ、自分が困ったら気軽に、仲間に相談して欲しい」
「相談？」
今度はしかめっ面だ。
魔界は荒れ果て、誰しもが自分のことで精いっぱいだった。だから助け合うことも相談することもできなかった。容易に想像がつく。
「お腹が空いたからごはん分けて、とか。足が痺れたから肩貸して、とか」
「めんどくさいわね」

メデューサが言い、またも皆が頷く。慣れてないから仕方ない。
「本当に面倒だったら助けなくていい。でも、できるだけ助け合って欲しい」
「それだったらまあ……」
納得していない空気だ。分かってもらうには、時間と根気が必要だな。
「朝ごはんでマナーを守るってのは、その練習。相手への気遣い。ちゃんと時間通り席に座るってのも、立派な助け合いなんだよ」
「そうなんですか？」
「現に、俺は助かってるよ」
「そうなんですか！」
ガイが食い気味に詰め寄ってきた。
「皆がマナーを守って、一緒に食べてくれるからね」
「なるほどなるほど！　それが気遣いですか！」
納得したようで一斉に頷く。
「ならもっと、麗夜ちゃんと仲良くなりたいわ」
スルッとメデューサが俺に腕を絡めてきた。蛇だから動きが素早い。
「俺と狩りに行きましょうよ。絶対に楽しいですぜ」
ガイがガハハと、俺の肩に手を置いてきた。

「わ、分かったから離れて」
最終的に、俺は皆にもみくちゃにされてしまった。
気遣いを学ぶには、もう少し時間が必要なようだ。

朝食が終わったら夕食まで自由時間。各自、自由に過ごす。
俺はいつも通り、自室で亜人の国との交易と、魔軍の意識改革計画案について考えようと思った。
ところが席を立った時、珍しく声を掛けられた。
「麗夜様。やっぱり今日は、俺たちの狩りを見てくだせえ」
ガイが、身の丈ほどの大斧を片手にやって来た。
その後ろにはメデューサなど魔軍幹部たち。なぜか不機嫌そうで鼻息が荒い。
「どうしたの？」
俺が椅子に座り直すと、ティアも同じようにした。
ガイはいつも、朝食が終わると仲間を連れて外に行く。だから今日もてっきり、そうするものだと思っていた。
声を掛けてくれたのは嬉しい。どんどん気軽に話してもらって構わない。
だけど、険しい顔で話しかけられたら別だ。心配になってしまう。
「あいつらが俺たちに、弱いくせに調子乗るなって言ってきたんで。喧嘩する訳にもいかねえから、

別の方法で実力を分からせてやろうと」
ガイが、大食堂の扉前でたむろする仏頂面のドラゴン騎士団とワイバーン騎士団を指さした。
「何かあったの？」
俺は椅子から立ち上がって騎士団の方へ行き、ダイ君に事情を聞く。
「事実を言ったまでです。俺たちの方がお前たちよりも麗夜様に相応しいから、麗夜様に馴れ馴れしくするなって」
ええ……。
「突然どうしたの？」
「だってあいつら、昨日も今日も麗夜様にため口ですよ！　さっきなんて麗夜様にとんでもない無礼を！」
ダイ君がギリギリッと、ガイたちを睨む。
すると、ダイ君の隣に居たキイちゃんも唇を尖らせる。
「今まで我慢してきましたが、あいつらは頭が悪いです！　なのに、麗夜様直属の騎士団である私たちにため口なんて！」
カリカリしてるな。
「麗夜様に寵愛をもらってるからって、調子に乗ってんだ」
エメ君など今にも殴りかかりそうだ。血の気が多いね。

しかし、いったいどうしたのか？　今まで問題なかったのに。
「麗夜に構ってもらえなくて、不貞腐れとるのか？」
食器洗い中のギンちゃんが、騒ぎを聞きつけてやって来た。慌てて来たらしく、エプロンに泡を付けている。
「不貞腐れている訳では……」
もごもごとダイ君たちが口ごもる。
そう言えば、魔王たちと仲良くするのに必死で、ダイ君たちとあまり話していなかった。
「嫉妬しているの」
ティアが腕組みしながらトコトコ歩いてきた。
「ダイ君たちの気持ちは分かる。ティアも、麗夜を取られたら悔しい」
取られるってなんだよ。
「うう……嫉妬という訳では……」
ダイ君たちは図星なのか、たじたじだ。
「せっかく話しかけてやったのによ。文句言われるなんて思わなかったぜ！」
ガイはダイ君の前に来ると、仁王立ちで睨む。
売り言葉に買い言葉で、負けじとダイ君も睨み返した。
「お前たちが失礼なのは事実だ！　麗夜様が許しても、俺たちは許さないぞ」

二人がカッカするので、それにつられて皆も熱くなっている。
このままだと完全に仲違いしてしまう。
「ガイたちはどんな風に話しかけたの？」
一応、詳細を確認しておく。
「普通に、おい、って言っただけですよ」
ガイは貧乏ゆすりしながら憤慨する。
乱暴な言い方だったんだな。人によっては喧嘩腰に感じるかも。
それに、気持ちは分かるけど貧乏ゆすりはダメだ。ダイ君たちがそれでイライラしちゃう。
「事情は分かったけど、どうして狩り勝負なの？」
「喧嘩する訳にはいかねえですから。狩りなら、どっちがつええか分かるってもんですよ」
ガイはガハハと腹の底から笑った。
なかなか難しい……。
白黒つければ、とりあえず騒ぎは収まる。しかしそれだと、どっちが勝ってもしこりが残る。
「どうしようかな……」
喧嘩両成敗とする訳にもいかない。ガイたちは普通に接しただけだから。
悪いのはダイ君たちだ。たとえ口が悪くても、喧嘩を売って良い理由にはならない。
しかしこの騒ぎの原因は、俺の不注意でもある。もうちょっとダイ君たちを気にすれば良かった。

「毎日勝負してみれば良いんじゃねえか」
困っていると、相変わらずプカプカ浮かんでいた朱雀が、助け舟を出してくれた。
「毎日ってどういうこと？」
「今日勝ったら、その日はそいつが偉い。でも次の日負けたら、その日は相手が偉い」
なるほど、それなら不満を引きずらなくて済みそうだ。
お互い引くに引けない感じだから、喧嘩の一つも必要かもしれない。
朱雀の提案は、適度にお互いの不満をぶつけ合える、ガス抜きに思えた。
「朱雀の言う通りにしてみたら？」
文句のつけようのない案だったので、ガイとダイ君に聞いてみる。
「良いぜ。今日も明日も明後日も、永遠に俺たちが勝つんだからな。口だけが達者な騎士なんて目じゃあねえぜ」
「こっちの台詞だ。毎日敬語の勉強をさせてやる」
二人は魔軍幹部と騎士団を引き連れ、お互いに牽制しながら外へ向かった。
「まさか、こんなことになるなんて思わなかった」
皆が居なくなると、俺はついつい愚痴を言ってしまう。
「皆、麗夜が大好きだからねぇ」
そう言いながら、スリスリッとティアが頬ずりしてきた。

「ティアも麗夜が大好き」
「どういうことだよ」
くしゃくしゃとティアの頭を撫でる俺。
「大好きだから良いの」
ティアはへにょへにょっと、赤ちゃんみたいにあどけない顔になる。可愛い。
「俺も大好きだぜ」
すると、どさくさに紛れて朱雀もすり寄ってきた。
「気持ちだけ受け取っておくから離れろ」
俺はこつんと、朱雀の額にデコピンする。
そして、額を押さえる朱雀を無視して、ティアとギンちゃんを誘った。
「心配だし、皆で様子を見に行こう」
「私は皿洗いがあるから遠慮しておく。二人で行ってこい」
ギンちゃんは手をヒラヒラさせて厨房へ戻っていった。
「ティアは一緒に行くよ」
ティアがぎゅうぎゅう抱き付く。
「離れろ。歩きづらいぞ」
「いやぁ～ん。今日はこのままが良い」

**立ち読みサンプル
はここまで**

俺はティアに抱き付かれたまま、ガイたちのあとを追った。
「それにしても、外に出るのは久々だな」
考えなければならないことが多く、部屋に引きこもっていた。
いい機会だから散歩しよう。緑豊かになった魔界も見てみたいし。
そうして魔界の森に入ったのは良いのだが、異常事態が発生していることに気づいた。
「なんか、木がデカくね？」
木々の全長は五百メートル近い。高層ビルみたいだ。
一月前に見た時は、普通の大きさだったはずなんだけど……。
「てかあれって、カブトムシとセミ？」
木の蜜を吸う虫の大きさが異常だ。人間よりも大きい。
あれに噛みつかれたら、樹液みたいに体液を吸われて一瞬で干からびるぞ。
やがてドッスンドッスンという地鳴りとともに、黒い影が近づいてきた。
見上げてみると百メートルはある巨大な熊だった。ガリガリと木を引っ掻いて樹液を舐めている。
「なぜ……？」
タンポポなどの雑草は、十メートルを超える大きさに成長している。
まるで自分が小さくなったみたいだ。何が起きたの？
「人間に変身したままで良いな？」